

---

# 僕（愛子）とバカ（明久）と召喚獣

まり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕（愛子）とバカ（明久）と召喚獣

### 【Nコード】

N0980BA

### 【作者名】

まり

### 【あらすじ】

工藤愛子は独りだった。一年の終わりに転校してきた愛子は、教室空気に耐えられず屋上へいきお弁当を食べることに。そしていざ食べようとするや突然、屋上の扉が開いた。そこで初めて僕の恋は始まった。

## 出会い（前書き）

二作目です

明久×オリ予定が愛子に

別に愛子は好きだからこれでいいですけどね

それではどうぞ

## 出会い

その出会いは突然で、だけど優しく、嬉しくて、僕の初恋になったんだ。

ホントに好きになって毎日気付けば彼のことはかり考えていたよ。その時あったことは、別にたいしたことないんだけどね。

いまはそんな彼と結婚して幸せな家庭を築いている。ちょっと忘れんぼうだけどね。でもそれがまたいいんだ。

「いってきまーす」

「いってらっしゃい あつまたお弁当忘れてる」

「あれ？ ホントだ いつもゴメンね」

「いいよ 夫婦だしそれくらい」

「じゃあ改めていってきまます」

「えー いってきまますのキスは？」

「なっ／／／／／ ……わかったよ（ちゅっ）」

「えへへ／／／／／」

「じゃあいってきます、愛子」

「いってらっしゃい、明久」

そう僕はバカで有名だった吉井明久と結婚しました。  
このお話は僕たちが結婚するまで、どんなことがあったか工藤愛子  
改め吉井愛子視点の話です。

## 出会い

「工藤愛子です もう一年の終わりだけどよろしくね」

僕は文月学園っていう不思議な制度をもった学校へ転校してきた。  
試験召喚制度ってよくわからないやつ。二年生になってから使っ  
つらいんだ。

でも僕は今一番友達が欲しい。だって何もできないもん。一年の最  
後だけあって皆、仲のよい友達がいる。  
ハッキリ言って羨ましい。多分、数日間は誰からも話しかけれな  
いからなあ。

まあ半日経った時、つまりお昼の時間。友達がいない僕は独りでお  
弁当を食べることになる。皆は机をくつつけあって食べていた。

「（僕一人だけ浮いてるよね……）」

結局、空気に耐えられなくなって僕は屋上で食べることにした。

キィ

屋上の扉を開けると広くて青い空が視界を覆った。とても晴れやかな気持ちになる。

僕はベンチに座り独りお弁当を――

「あれ？ 先客がいる？」

――食べようとしたら誰かがきた。どこにでもいそうな普通の子、でも顔は少し可愛い？かもしれない

「君、初めて見るけど転校生？」

「うん 工藤愛子です よろしく」

「一人ってことは………僕と一緒に弁当食べる？」

「えっ………」

なんで？なんでイキナリそんなこと言うのさ。

「僕の名前は吉井明久 よろしくね工藤さん」

「……………」

突然のことに反応できなかった。

なんで？

なんで？

なんで？

なんで初対面の僕を誘ってくれたの？

ツウ

涙がでた。

「えええ！？ なっなんで泣くの！？」

わからない。なんでかしらないけど涙がでたんだもん。別に悲しくはないよ。だってー

「嬉しい 嬉しいよ吉井君」

ギユウ

衝動に駆られて吉井君に抱きついた。

「わわっ ちょっと抱きつくのはー」

「お願い もう少しだけこのままでいさせて」

僕はいま泣いている。嬉涙を流している。ホントは今すぐに一緒にお弁当食べたいのに泣いた顔を見て欲しくない。

僕の体は震えていた

「……わかったよ　いつまでも待つよ」

吉井君はそう言って優しく僕を抱いてくれた。吉井君の体温が直に伝わってすごく暖かい。それですごく落ち着く。僕はそれから長い間吉井君に抱きついたままでいた。

ドキドキドキドキドキドキドキ

胸が高鳴っている。ちょっと苦しい。

これが恋かな？

こうして僕の初恋が始まった

別れ（前書き）

明久の過去が少しでます

それではどーぞー

## 別れ

しばらくして僕は泣きやんだ。でも顔をあげることはできなかった。だって男の子の胸で泣いたんだよ？

恥ずかしいし、泣いてたから目がきつと赤くなってるもん。それにもっと吉井君の体温を感じたい。

「泣きやんだみたいだね？ ならそろそろ……」

「……うん」

無情にも吉井君の方から言ってきた。まあしかたないよね。いつまでも抱きつかれたら嫌だろうし。そう思っ僕は吉井君から離れた。

「大丈夫？」

「うん ありがとう」

「じゃあお弁当食べよっか」

「……うん」

僕たちはお弁当を食べ始めた。けどお互い話すこともなく、ただ時間だけが過ぎていく。何か話さないか。

「ごっごめんね吉井君」

「ムグムグ 何が？」

「僕につき合わされてお弁当食べるなんて嫌でしょ？」

「ゴクン 別に むしろ……何でもない」

吉井君はそこで話を切ってしまった。また時間だけが過ぎていく。  
えっ？えっ？どうすればいいの？

「……明日も一緒に食べる？」

「えっ……？」

いついま何て？

また一緒に食べてくれるの？

「嫌ならいいよ 早くクラスに馴染まないといけないからね」

「ぼっ僕は大丈夫 でも吉井君は？」

僕につき合わされるなんて迷惑に決まってるよ。吉井君にだって友達はいらるだろうし。

また僕と一緒に食べなんてしなくてもいいんだよ？

「僕も大丈夫 少なくとも工藤さんが友達を見つかるまでは毎日でも一緒になるよ」

「……ありがとう」

あっまた泣きそうになってきた。吉井君はズルイよ。僕にとって嬉

しい言葉でしか言わないんだもん。  
こんな吉井君はきつとモテるんだろうな。

「ねえ吉井君 吉井君には彼女っているの?」

「ほえ?」

「うわあああ／＼／＼／

なんてこと聞いているの僕!?!これじゃまるで吉井君に気があるって  
言ってるようなもんだよ。

「ううう恥ずかしい……」

「彼女? いないけどどうしてそんなこと聞くの?」

「えっと そのー 興味本意?」

「ふーん」

「ふうなんとかバレなかったかな?でもバレてて何も言わないのかも  
しれない。」

「うーん。どっちかな。」

「キーンコーンカーンコーン」

「あっもうクラスに戻らなきゃ」

「えっもう?早いよ。」

「じゃあね工藤さん またー」



口にしなきゃならない気がした。

「あの時の僕と工藤さんを重ねているのかな？」

僕も昔、転校してきて同じことを味わった。だから工藤さんの気持ちにはよくわかる。

寂しくて。

悲しくて。

誰かに助けて欲しくて。

「工藤さんは僕が助けたのか……」

僕も助けてもらった。その子とは友達になっていつも一緒にいた。

中学の卒業の時に別れちゃったけど、いまでも大事に思ってる。

でもそれは一年以上一緒にいたからであって、もうすぐ一年が終わる。二年生になる。その時に振り分け試験があるけど多分同じクラスにならない。

「だからって助けられない訳にはいかない」

辛い別れになれそうだな。

そう思うと胸がキュウと締め付けられた。

本当の別れ（前書き）

悲しめです

それではどーぞー

## 本当の別れ

「（次の休み時間に僕に会いに来るって言ってたけど、吉井君はホントに来るのかな？）」

次の休み時間が待ち遠しかった。早く授業終わらないかな。そう思っ  
てチラッと時計を見るけど全然進んでない。

待っている時間が長く感じるのはちよつと憂鬱。その間、吉井君の  
ことを考えると胸がドキドキする。  
やっぱり好きになったのかな。

キーンコーンカーンコーン

待ちに待った休み時間になった。吉井君、来てくれるかな？

ガラッ

「ここに工藤さんっている？」

あっ吉井君。来てくれたんだ。そのっ僕に会いに／／／／／

『工藤？ 転校生の？』

「そつだよ 工藤さんに用があるんだ」

「よっ吉井君／＼／＼」

「工藤さん 言った通り会いに来たよ じゃあちよっと外出しよう？  
工藤さん借りてくよ？」

『あっああ どうぞ』

「行こうか工藤さん」

吉井君は僕の手を掴んで教室の外へ連れていった。

つてええ！？いきなり手を／＼／＼／

吉井君ってプレーボーイなの！？

「違っよ」

「えっ！ 何でわかったの？」

「……声に出た」

嘘っ！声に出てたんだ。また恥ずかしい思いしちゃったよ。それに

吉井君に失礼だよ。

「しっごめんね」

「いいよ 気にしてない」

吉井君は僕を教室からそう離れてない所へ連れてきた。一体どうしたんだろ？

「明日には僕はいらなくなってる」

「えっ？」

何言ってるの？どういう意味？

なんで吉井君がいらなくなるなんてことを言っの？

「あんな風に連れ出したらきっと僕と何かあったのか聞かれるそのときにちゃんと話ができれば友達ができるでしょ？」

「あっ……」

もしかして吉井君はそこまで考えて手を掴んだの？僕はただ約束を守って来てくれたとしか思ってたのに。

「友達ができればお弁当もクラスの誰かと食べられるでしょ？ なら僕は明日からいらないよね」

「そっそんなことないよ！ まだ友達ができるかもわかってないのに……」

「今日友達ができなかったら何時できるの？」

「それは……」

「工藤さん 大丈夫だよ きっとできるさ」

確かに吉井君の言う通り今日できなかったら何時までもできないと思う。

でも友達ができたなら吉井君に会えなくなっちゃう。どうしよう。

「話はそれだけ じゃあね」

「あつ待って！」

僕の声は聞こえてるハズなのに吉井君は振り返らずに戻っていった。

迷ったらダメだ。吉井君は僕にチャンスをくれたんだ。吉井君の気持ちに答えるためにも友達を作らなきゃ。そう決意して僕は教室へ戻った。

教室

『あつ戻ってきた』

『ねえ 吉井君とどういう関係なの？』

僕は教室に戻ったら皆に質問攻めにされた。僕はそれに見合った答えを述べていった。それだけで友達になろうって言うってくれる子もいた。

でもこれで吉井君とは会えなくなった。

いやっ会わなくちゃ。だって僕まだ吉井君にお礼言っていないもん。次の休み時間、僕が会いに行く。そしてお礼を言っただ。

ありがとうって。

いよいよ休み時間となった。あつでも吉井君のクラス知らないや。聞いちゃえばいいか。

僕はさつき友達になった優子に聞いてみた

「優子、吉井君ってクラスわかる？」

「吉井君？ たしかCクラスだったと思うわよ」

「そっか ありがとう」

早く吉井君の所へ行かなくちゃ

Cクラス

「ねえ 吉井君いる？」

Cクラスに着いてすぐに僕は聞いた。会ってお礼を言うだけなのに必死になつてる自分にビックリだよ。僕の質問には赤髪の男の子が答えた。

「明久？ ってことはお前工藤か 残念だな、明久はいない いな  
いってよりお前に会う気がないか」

「！ 何で会う気がないの！」

「明久から伝言だ 『友達は作れた？ なら僕なんかと仲良くする  
必要はないからね、二度と会わないようにするよ 頑張つてね』だ  
そうだ」

「吉井君…… 別に会うくらいいいじゃん」

「工藤、お前からは伝言ないか？」

赤髪の子は僕にそう聞いた。  
あるよ。あるに決まつてるじゃん。

「吉井君にありがとうつて伝えて」

「ああ わかった」

お礼は直接会つていいかたけど吉井君は僕に会わないって。  
伝言になつたけどしかたないよね。

僕は自分の教室へ戻ろうとした。吉井君と会えないならここにいる  
必要はないしね。

「おっと もう一つ伝言があるの忘れてた」

「！」

「たしか『別れが辛くないように会わなかった ゴメンね』だ」

僕は振り返らずにそのまま教室へ戻っていった。  
でもそのまま帰らずにトイレに寄ってー泣いた。

「辛くてもいいから、それでもいいから会いたかった 会いたかったのに……」

そんなのずるいよ

「次会えたら、僕から逃げないで……」

転校初日から僕は出会いと別れを味わった。それは長い間一緒にいた友達と離れるくらい悲しかった。

その想いを胸に僕は二年生になった

## 本当の別れ（後書き）

次はもう二年生になったところからです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0980ba/>

---

僕（愛子）とバカ（明久）と召喚獣

2012年1月3日03時49分発行